



映画「むかし Matto の町があった」と「福祉カフェ」から学んだこと



本研究所研究員 柳 政勝
(精神保健福祉)

映画の原題「C'era una volta la città dei matti」。日本語訳「むかしMattoの町があった」を紹介したい。イタリア精神保健改革の最初の20年を、2012年夏から描いた映画である。イタリア語のmattoは狂気をもつ人、「Mattoの町」は精神病院を意味する。

イタリア国営放送RAIが作ったこの映画は3時間の大作で、2010年2月7日(日)8日(月)の夜9時10分から1時間半づつ二夜連続で放映されて、21%以上の高視聴率だった。ヨーロッパ各地で、南米のブラジルやアルゼンチンで、トルコやイランで自主上映運動が展開されている。

表題の映画は熊本の有志の方々が本年5月11日(日)に上映した。今後も熊本で自主上映が行われる予定である。あらすじをここに紹介する。

第一部では主役は3人。イタリア精神保健改革の父、フランコ・バザーリア。アメリカ進駐軍に凌辱された女性から生まれたマルゲリータ。旧ユーゴスラビアでファシストとナチスに蹂躪されて家も肉親も失ったボリス。1961年、ゴリツィア県立精神病院長に赴任したバザーリアは、小さな檻に閉じ込められていたマルゲリータに顔を近づけたとたん、唾を吐きかけられる。独房のベットに15年も縛り付けられているというボリスを回診すると、屈強な看護師たちに取り押さえられた立ち姿のボリスの汚れた股間に、ホースの水が無遠慮にかけられる。

バザーリアは、ゴリツィア病院の収容臭さをなくすことに、心血を注ぎ、こんなバザーリアにマルゲリータやボリスの頑なな心も少しづつ緩んでくる。そんな中、病院から外泊した男性が妻を殺める事件が起こりバザーリア院長は病院を追われる。1969年こうして映

画の前半が終了する。

第2部は1971年、トリエステ県代表(日本の県知事に当たる人物)ミケーレ・ザネッティが県立サンジョヴァンニ病院長になってほしいとバザーリアを口説くとバザーリアは「白紙委任状」(カネを出しても口を出さないということ)を条件に院長を引き受ける。マルゲリータもボリスも県立サンジョヴァンニ病院の入院者として登場する。ここでも精神病院での集団生活や規則などの必要以上に管理されたシステムが人間性の荒廃を招いてしまうことがわかる。精神疾患の治療や支援には何が必要なのか考えさせられる。病者であるがその前に人間という事実があり、人として接していくことの必要性が映画の全体を通して訴えてくるものがある。この映画は精神保健医療福祉関係者はもちろんだが学生や一般市民の方々にも視聴してほしい。導入の部分では、暗く陰湿な精神科病棟を映し出し幽霊屋敷のような雰囲気醸し出している。拘束したり、管理的な上から目線の看護師が印象的だ。

新院長が次々と改革していく様子が描かれている。『看護師は患者の話聞きなさい』『看護師は(患者に向かって)話しなさい』。人として扱うことの大切さが映し出されている。また、『拘束することが人を狂わせていくことの警鐘にもつながる』と映画では訴えている。対話のない治療は暴力ということも強調している。3時間以上の長編映画であるが、“あっ”という間に終わってしまった印象である。

日本の精神科病院は約1700か所、存在する。また病床数は30万床を超えている。平均在院日数は漸く300日を割ったところであるがまだ、長期入院や社会的入院が7万人以上いる。

このことから日本の精神科医療は後進国であることは間違いない。これからの精神科医療を考えるうえで示唆に富む映画である。

次に紹介したい福祉関連情報について説明する。

2014年5月15日(木)定例の「福祉カフェ」を開催した。福祉カフェとはなにか。時間は少し遡るが2011年10月に行った精神障害者支援講座の受講生同志が「このまま解散ではもったいない」との意見をもとに始まった精神保健福祉に関心を持つ人たちの集まりである。月1回の例会(熊本学園大学1421教室を借用して)を開催している。プログラムはそこに集まったメンバーの体験談や医療・福祉に関する困りごとを話す。福祉の現場について(例えば、就労継続支援事業所はその利用者を就労場面を通して支援することが求められるが、果たしてこれが支援と言えるのかどうかという事例をもとに意見交換する)話すというものからEテレで放映された福祉映像(精神保健福祉関係)を当日集まった市民の方々と一緒に視聴している。これが福祉カフェである。

この活動の中で参加した「オルタナ」就労移行支援事業所施設長中村光宏氏の活動報告に興味をもった。この「オルタナ」は精神障害者を中心に支援が行われている施設である。従来、事業所や施設で行われる支援は支援者と非支援者(当事者)が一方向に向かって行われることが多いが、ここでは日常の活動は朝礼ミーティングから始まりハーブガーデンや野菜栽培などの体験型からゲストスピーカーやグループディスカッションなどの自立支援型で支援者も伴走者として係っている。通常行われている支援プログラムは表1の通りである。

表1

	月	火	水	木	金	土
AM	農園作業等	同左	同左	同左	同左	同左
PM	話し合い等	同左	同左	同左	同左	同左

私が注目すべき施設外の活動と内容についてこれから報告する。

この日の例会の報告タイトルは「湯島リポートキャンプ報告」である。

これはオルタナの自主事業であり、目的は湯島での共同生活(リポートキャンプ)を通して働くことや人との関係を見直したり、自らの振り返りを行い、または自然に触れることにより、人が持っている生きるエネルギーを活性化することができるというものである。湯島リポートキャンプ実施計画書をここに載せる。

また、熊本日日新聞の平成26年4月27日朝刊に湯島リポートキャンプが掲載されていた。リポート(再起動)の意味とキャンプの趣旨として『心の病や引きこもりの人たちに作業を通じて働く喜びを実感してもらい、社会復帰を支援する』と記されていた。『自然や人々の暮らしに触れることが心の安定につながる。また、人の役に立つことで、自身の存在価値を見直すきっかけになる』と泉俊雄代表理事の言葉が載せられていた。湯島のキャンプは20代から40代の16人が参加。島民の要望を聞きながら、地区の清掃や店のチラシ配りなどを担当。4月25日は漁師と協力してワカメの選別作業に従事した。参加した20代の女性は『地元の人と接しているうちに働く意欲、気力が湧いてきた』と心の変化について語った。

日々行われているオルタナでの就労移行支援事業と今回の施設外でのフィールドワークが良い相乗効果を生んでいる。朝の食事作りから始まり夕食も仲間と一緒に食事作りをしている。また、地域の住民宅に出向いて行ったり、その地域で困っていることやお手伝いできることなど地域住民と語り、心の病の当事者が「いま、ここで」という感覚のもとにできることを淡々と行う。このことが地域住民に喜ばれ地域住民との循環的人間関係ができたのではないか。この循環的人間関係とはどんな意味を言うのか。

「援助関係を目指して坪上宏の世界」やどかり出版の中に出てくる文言のひとつを私が付け加えたものである。この本はタイトルの

オルタナ自主事業・湯島リブートキャンプ実施計画

【目的】 都会で生活する若者（精神疾患を含む）が、共同生活（リブートキャンプ）を通して、湯島で様々な職業体験を通じ、暮らしの知恵を学ぶ。この体験で職業への興味、働くことへの意欲喚起を呼び起こし、そして湯島の魅力発見に寄与する。

【日程】 平成26年4月21日～4月27日6泊7日

【場所】 上天草市大矢野町湯島

【人数】 20名とスタッフ6名

【費用】 13,000円

【スケジュール】

	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時	18時	19時	20時
4 / 21	起床・体操	朝食づくり	朝食	湯島散策			昼食	自由行動					夕食作り	夕食	振り返り
4 / 22	起床・体操	朝食づくり	朝食	湯島職業探し			昼食	職業体験					夕食作り	夕食	振り返り

言葉の通りワーカー、クライアント関係を著したものである。援助関係による3つの性質の提起を行っている。

1つは一方的な関係をいう。これは精神保健福祉領域ではよくおこなわれている関係性である。これはワーカーがクライアントの状況を一方的に判断して一方的に働きかけるもので、緊急、重篤な場合に必要な関係である。

2番目が相互的な関係でワーカー、クライアント相互のやりとりで両者にとって必要な事柄に関しては、折り合いを求めてお互いにコミュニケーションするが、ワーカーはワーカーの判断でクライアントはクライアントで判断を行う関係をいう。

3番目が循環的な関係で、これは相手を通して自分を見直す、ワーカーがクライアントを通して自分を見直す、あるいはクライアントがワーカーを通してクライアント自身を見直す、というような関係を循環的な関係ととらえるということが書かれている。

この3番目の関係が湯島リブートキャンプ

の中で体験できた人間関係ではなかろうか。こころの病当事者が地域住民との体験的交流によって自分を見つめ直す。この体験と自分を見つめ直す行為が新しい自分を発見したり、援助を受ける役割から援助をする役割に変わり自己肯定感を育み、社会の中の居場所を見つける一歩になったのではないか。

これからの精神保健福祉分野の支援方法として実践されたのではなかろうか。支援者が一方的関係で支援するような硬直した関係でなく、また、相互的な関係を越えた循環型と呼ばれる相互に意味のある関係性をつくり、自ら振り返り、胸躍るワクワク感などの体験があったのではなかろうかと予測できる。それも地域住民と心の病を持つ人との人間的交流をベースに実践しているところが面白い。

これからも「福祉カフェ」ではそれぞれが体験した経験や支援の方法など話せる場づくりをして行きたい。また、在校生にも参加して（現在も参加している）現場の声を聴き、幅広い豊かな援助者となってほしい。